

# 高等学校分科会

## 第9分科会

### 多読教材を通して主体的に英語を読む態度を育成する指導の工夫

発表者： 滋賀県立水口東中学校 伴 野 恭 士  
滋賀県立水口東高等学校 山 下 泰 世  
助言者： 岐阜大学教育学部 巽 徹

#### 研究の目的

本校は中高一貫教育校として、中高が連携しながら、生徒の進路実現を達成することを目標にしている。本校の英語教育の課題の一つは、6年間を見通した英語指導体制を確立することである。二つ目は読む力を高めることである。朝の読書や国語科の読書課題を通して読書習慣を身に付けた生徒はいるものの、英語の長文読解に苦手意識を持つ生徒が多いのが現状である。このような課題を踏まえ、中高を通して読む力を高める取組を行う必要性を感じ、指導改善を試みた。どのような指導で生徒の読む力が高まるのか、どうすれば英語を読む楽しさや学習の深さを味わう生徒を育てることができるのか、という点に着目し、多読教材を活用した指導の可能性を追究した。

## 第10分科会

### 高等学校授業実演

### 虎姫高校で育てたい学習者像を目指した英語指導のあり方

発表者： 滋賀県立虎姫高等学校 川 瀬 千 津 他  
助言者： 立命館大学 山 岡 憲 史

#### 研究テーマの設定の理由

SSHの取組みやIB認定の条件整備を進める過程で、これからの時代を担う、本校で育てたい生徒像をあらためて整理し、発信する必要性を感じるに至った。そこで、昨年度、全教員で話し合い教育目標・方針の刷新を行った。教科内においても、教育目標実現のための指導の在り方について継続的に議論している。また、今年告示された新学習指導要領において、各高校で生徒が身に付けるべき資質・能力を育成するために授業の在り方を改善する必要があると示されている。このような経緯から、研究テーマを設定した。

## 第11分科会

### グループワークを軸にしたコミュニケーション能力を育む授業

発表者： 滋賀県立草津東高等学校 徳永 博紀  
助言者： 岐阜聖徳学園大学 加納 幹雄

#### 研究の目的

##### (1) テーマ設定の背景

昨年度まで、農業等の4系列からなる総合学科に勤務していた。半数以上が卒業後に就職をするが、入学時は、人と関わることに自信がなく消極的な生徒が多く見られた。また、英語についても、中学校の導入段階での躓きから苦手意識が強い生徒が多く、学習への興味・関心・意欲は低かった。このような実態から、英語によるコミュニケーション能力を身に付けさせるためには、基盤となる社会人基礎力としてのコミュニケーション能力を育まなければならないと痛切に感じた。そして、グループワークを軸とした英語の授業で、社会人基礎力としてのコミュニケーション能力を養いながら、英語によるコミュニケーション能力を育むことを研究課題として取り組んだ。その結果、生徒が互いに関わり合いながら主体的に授業に取り組む姿勢が見られるようになり、学習意欲も高まった。また、文法等基本的な学習内容の定着率も向上した。

前任校で2年間グループワークに取り組んだ後転勤した現任校は、文武両道をスローガンとし部活動も盛んであり、生徒の99%が進学する。大学進学への意識が非常に高く、真面目で勤勉、授業に向かう意欲も高い。前任校で課題としていた社会人基礎力としてのコミュニケーション能力はある程度身につけている。また、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善(アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善)を目指し様々な取り組みが行われている。しかし、そのような実践が英語によるコミュニケーション能力の向上にどのように繋がっているかということや、授業中の生徒の活動の見取り方や評価方法については、まだ明確にできていない。また、2年後には英語の外部試験の導入を含む新しい大学入試制度が実施され、新しい大学入試に対し生徒に不安を感じさせることなく

英語の4技能の育成を図ることや、新学習指導要領に示された資質能力を育成することが喫緊の課題になっている。このような点も踏まえ、今年度は各授業でのグループワークの工夫を含む単元毎の CAN-DO を作成し、限られた時間で英語のコミュニケーション能力を効果的に育成するためのグループワークを試みることにした。

#### (2) 研究の方向性

本研究では、英語の授業において、グループワークを軸にして生徒の英語によるコミュニケーション能力およびその基盤となる社会人基礎力としてのコミュニケーション能力の育成を目指す効果的な授業について研究する。

なお、本研究では、社会人基礎力としてのコミュニケーション能力を、「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力」とし、英語によるコミュニケーション能力を、「情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりする能力」と定義する。

## 第12 分科会

### Skype を活用したグローバル教育の可能性

発表者：滋賀県立米原高等学校 堀尾 美央

助言者：関西大学 久保田 真弓

#### 研究の目的

本校は、滋賀県北東部の湖北地域に位置し、普通科が5クラス、理数科が1クラス設置されている。普通科5クラスのうち、1クラスは英語コースであり、年間を通じて、英語力を伸ばす行事を数多く実施している。また、普段の授業の中でも、英語の4技能を意識した活動やディベート活動など、実践的な活動を取り入れている。本校生徒の中には、授業内での英語のコミュニケーション活動については、比較的前向きに取り組む生徒が多い。しかし、英語のアクセントや発音、文法が無茶苦茶でも通じる、日本人同士でしか伝わらない英語で終わってしまう頻度が高い。このままでも、実際に外国人とコミュニケーションを取るのであればさほど問題はないが、いざ外国人を目の前にすると黙ってしまう生徒が非常に多かった。このような背景から、英語コースの生徒を中心とした、本校の生徒たちに、実際に外国の人を相手に英語を使う機会をより多く提供する目的で、本取り組みを2016年から実施した。

## 第13 分科会

### 主体的なアウトプット活動を活性化するためのフィードバックを通した指導と評価 ～生徒の主体性を育む指導と評価の構造～

発表者：滋賀県立長浜北高等学校 坂本 美佳

助言者：京都橘大学 中井 弘一

#### 研究の目的

本校の生徒は、教員の指示どおり素直に学習活動を行うことができるが、主体的に活動することは苦手で指示されることを待ったり、内容を深く考える作業を伴うような課題からは逃げがちでチャレンジすることを避けたりする傾向がある。また、自分の学習結果を振り返ることもあまりしない。アウトプット活動が重視される現在、本校生をどのようにアウトプット活動に主体的に取り組ませるかを考え、ステップ毎に小目標を積み上げる指導や、生徒自身にミニッツなどで学びを振り返らせ教員がそれにフィードバックをする授業実践を行った。本発表はその指導方略やフィードバックを通した形成的評価活動の効果について報告する。

## 第14分科会

### 求められる「身近な英語」教育

発表者：大阪府立布施高等学校 定時制の課程 日野 雄太

助言者：立 命 館 大 学 湯川 笑子

#### 研究の目的

本校では、卒業後就職する生徒がほとんどで、将来海外の大学へ留学する生徒はほとんどいない状況だ。また、海外旅行へ行きたいという声もほとんど挙がることなく、生徒の多くは、英語を学ぶ必要性を感じられていないようにう

かがえる。このように感じている生徒に、日本を訪れる外国人観光客との間に生まれるコミュニケーションを学ぶ「身近な英語」教育を取り入れることで、彼らに英語を学ぶ動機を与え、英語を自分にも身近なものと感じ、英語の授業に前向きに取り組めるようにする。

## 第15分科会

### 「英語の力を劇的に伸ばす指導」

～工業商業などを学ぶ生徒の心に火をつけ思いや考えを発信する力をはぐくむ～

発表者： 堺市立堺高等学校 奥谷 勝弘 ・ 鍋谷 愛

助言者： 大阪樟蔭女子大学 菅 正隆

#### 研究の目的

創立11年目を迎えた本校は、「理数に関する学科（サイエンス創造科）」「工業に関する学科（機械材料創造科・建築インテリア創造科）」「商業に関する学科（マネジメント創造科）」の3つの学びの系列を設置している。工業・商業を専門に学ぶ生徒が大半であり、卒業後は、大学等への進学を希望する生徒と就職を希望する生徒がほぼ同数である。本実践研究では、さまざまな希望やニーズをもち、将来それぞれの世界や進路に羽ばたく生徒一人ひとりが、自分の思いや考えをもち、英語で発信する力を獲得できるようになる指導を追究する。

#### 【研究仮説】

生徒の心に火をつけ、思いや考えを発信する力をはぐくむ授業を積み重ねることによって、生徒は主体的に学ぶようになる。外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、外国語を用いて、情報や考えなどを的確に理解したり、表現したり、伝え合ったりする力が向上する。

## 第16分科会

### 生徒の英語習熟度に応じた再話活動のバリエーションと 再話活動に至る語彙・内容理解・音読の指導

発表者： 京都府立桃山高等学校 佐々木 啓成

助言者： 桃山学院教育大学 鈴木 寿一

#### 研究の目的

文部科学省による「平成29年度英語力調査(高校3年生)」の結果によると、CEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)のA2レベル以上の割合が、「読むこと(33.5%)」、「聞くこと(33.6%)」、「話すこと(12.9%)」、「書くこと(19.7%)」であり、「話すこと」と「書くこと」といった産出技能の課題が大きい。近年、バランスの取れた4技能の向上が求められる中で、高等学校では受容技能の配点が高い大学入試も視野に入れながら、産出技能も育成できる発信型の指導を模索する必要がある。アウトプット活動を導入した指導の在り方を考えるときに、本文の内容を英語で話したり、書いたりする再話活動はそのアイデアの1つとなりうる。しかし、英語による再話活動は特に英語熟達度の低い学習者にとっては、負荷の高い活動であり、限られた時間内でうまく本文の内容を伝えることができない場合が多く、指導する学習者の英語熟達度に合った現実的で効果的な再話活動の方法を模索していくことは重要である。本研究では、先行研究を概観しながら第二言語習得研究の知見から再話活動の必要性について考察したり、再話活動に関わる様々な要素を整理して再話活動の指導方法を提案するだけでなく、再話活動につながる語彙・内容理解・音読指導にも言及し、さらには、数値データや学習者の作品を分析することで、より良い再話指導の在り方を検証することを目的とする。

## 第 25 分科会

### 中高一貫教育校における英語ディベート指導のあり方研究 ～ディベートを通した中高生の絆プロジェクト～

発表者：滋賀県立守山中学校・高等学校 戸 田 行 彦

助言者：桃山学院教育大学 鈴 木 寿 一

#### 研究の目的

本校は併設型の県立中高一貫教育校であり、中学校では特色ある科目で準備型の英語ディベートを、高校では英語表現の授業で即興型の英語ディベートに取り組んでいる。

このような現状のもと、本研究の目的は、中学校での取り組みと高校での取り組みを今一度振り返り、中高一貫教育校として双方で取り組んでいる英語ディベート指導を、「中高接続」を一つの観点により良くし、発展させることである。そこで以下の二つの仮説を立てた。

仮説① 英語ディベートを始める時は、中高生とも準備型から学習するべきである。

仮説② 中3生と高1生の合同交流授業は中高生にとって、学びの中高接続をスムーズにする上で有意義である。

## 第26分科会

### 「生徒が動く」タブレットを活用した授業実践 ～アクティブ・ラーナーを目指して～

発表者：立命館守山中学校・高等学校 辻 大樹

助言者：立命館学園 橋詰 龍

#### 研究目的

急速な情報化が進む社会において、主体的な情報活用能力を育成することも重要視されてきている。新学習指導要領では、教科等横断的な視点に立った資質・能力として、情報活用能力が言語能力や問題発見・解決能力と並び、学習の基盤となる資質・能力として位置づけられており、これまで以上に ICT が大きな役割を果たすと期待されている。さらに、文部科学省では「次世代の教育情報推進事業」を実施し、各推進校における実践を基に、ICT を活用した指導方法や授業改善などの研究を進めている。

このような状況の中で、本校においても 2014 年よりタブレット (iPad) を導入し、本格的な ICT 教育に取り組み始めた。現在では全生徒が 1 台のタブレットを所持し、英語の授業に限らず、あらゆる教科において、タブレットが授業内で利用されている。しかし、関心が高まる一方で、タブレットの活用法に関してはまだまだ未開拓な部分が多く、その実践例も極めて少ない。そこで、本研究では、主体的学び、生徒が動く学びを促す ICT 教育の指導法を考案し、従来の授業では課題とされていた様々な問題を解消し、より効果的に英語の運用能力を高めていく実践モデルを提案する。

## 第 27 分科会

### アウトプットにつなげるリーディング指導

発表者：滋賀県立膳所高等学校 富 永 幸

助言者：岡山大学大学院教育学研究科 高 塚 成 信

#### 研究の目的

現行学習指導要領では「4 技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成する」ことがキー・コンセプトであり、次期学習指導要領でも「聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けて統合的な言語活動」を行うことが重視されている。また、高大接続改革により 4 技能試験の導入が確定し、発信力を伸ばすことは大学入試においても不可欠な要素となっている。このような状況に鑑みて、読んで理解されることを目的としたリーディング教材を使った授業においてアウトプット活動を行うために有効な指導手順について生徒の学習段階を考慮しながら考える必要がある。

本研究では、「コミュニケーション英語」の授業においてアウトプット活動を重視することの意義とその効果を考察したうえで、「リーディング教材として理解した英文を、生徒の受容語彙と発信言語彙の違い、文構造などに注目してパラフレーズする活動を継続的に行うことにより、生徒は、既習言語項目の運用力を高めるとともに、発信に活用できるさらなる言語資源を蓄積することを促し、自分なりの平易な表現

で文法的に正しく伝える力を育成することができる」という仮説のもとで指導を行い、リテリング活動や自己表現活動において生徒が使用する言語の変容を観察し、その指導の有効性を検証する

## 第28分科会

### ICT 機器を活用したリテリング活動の実践

発表者: 滋賀県立安曇川高等学校 杉浦 悠真  
助言者: 京都外国語大学 石川 保茂

#### 研究の目的

本校は滋賀県北西部に位置し、普通科が1学級(1学級を2学級編制)、総合学科が4学級(今年度より3学級)を設置しており、それぞれの学科の特色に応じた授業が行われている。普通科では1学級を2学級編成(20人学級)とし、少人数でのきめ細やかな指導を実施し、四年制大学の国公立や私立進学を目指した授業内容と教育課程の編成がなされている。本校普通教室の ICT 機器設備はこれから充実させていく段階にある。そのような環境下で限られた ICT 機器を授業の中で活用し、その学習効果を調査する。そこで以下の二つの仮説を立てた。

- (1) タブレット端末等の ICT 機器を活用したリテリング活動を行うことで、学習内容の理解をより深めることができる。
- (2) タブレット端末等の ICT 機器を活用したリテリング活動を行うことで、英語学習の意欲を高めることができる。

## 第 29 分科会

### 滋賀県高等学校英語教育研究会(高英研)

発表者: 滋賀県高等学校英語教育研究会  
高島高校 中野翔氏  
信楽高校 西森万里子  
守山高校 吉野欽哉

助言者: 滋賀短期大学 内田幸代

本分科会では、滋賀県内の各高等学校が連携し、英語教育を推進するための、滋賀県高等学校英語教育研究会(高英研)の活動を、主に「滋賀県英語ディベート大会」、「ミシガンカップ・スピーチコンテスト」、「フレンドシップカップ・レシテーションコンテスト」の3つの行事を通じて、お話しさせて頂きたいと思います。

いずれの行事にも滋賀県内高等学校の英語教師の熱い思い、そして教師間の「つながり」によって育ってきており、今後、これらを益々発展させることを通じて、生徒たちに還元できればと考えています。また、皆さま方のご意見やアドバイスを頂戴できると幸いです。宜しくお願いいたします。

- |                              |      |       |
|------------------------------|------|-------|
| (1) 高英研ならびにディベート大会について:      | 高島高校 | 中野翔氏  |
| (2) ミシガンカップ・スピーチコンテストについて:   | 信楽高校 | 西森万里子 |
| (3) フレンドシップカップ・レシテーションコンテスト: | 守山高校 | 吉野欽哉  |

## 第30分科会

### 「英語の型」で発信できる4技能伸長プログラム～外部英語検定の結果と合わせて～

発表者: 兵庫県立伊丹高等学校 佐藤 司  
助言者: 神戸大学 ルックス マシュー

#### 研究の目的

英語で情報を理解し、それを基に自分の考えを英語圏で求められる英語の型で発信できる4技能を育成するために3年間のプログラムを組み立て、その成果と課題を外部英語検定で検証する。アウトプット(自己表現)の機会を増やし、表現力・思考力・論理力を伸ばす。

## 第 31 分科会

### 生徒の意見・考えを引き出すための授業実践 ～リフレクティブ・プラクティスを通して～

発表者：大阪府立槻の木高等学校 南 侑樹

助言者：福井高専 藤田 卓郎

#### 研究の目的

本研究の目的は2点ある。1点目は、授業の中で生徒の意見・考えを深める実践を探求することにある。2点目はリフレクティブ・プラクティス(内省的実践)を通じた実践を報告することにより、参加者の先生方と実践研究の例を共有することにある。

## 第 32 分科会

### 教科書の内容を深め、思考を活性化する授業の取り組み

発表者：大阪府立箕面高等学校 有光裕美 森田琢也

助言者：近畿大学 木村正則

#### 研究の目的

生徒を主体とした、能動的でかつより魅力的な授業展開のため、コミュニケーション英語の教科書を使用し、どのような協働的な学習形態が効果的かをみる。また第2言語での生徒自身による作問が思考をどう深めるかを検証する。

形態①:ラウンド制におけるペアワーク

形態②:Question Formulation Technique